
ヤーウェの鼓動

Grim Reaper

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤーウエの鼓動

【Nコード】

N1648Y

【作者名】

Grim Reaper

【あらすじ】

世界に生まれる万物をある宗教団体は「ヤーウエの鼓動」とよんだ……。ある日、黒の装束に身を包んだ青年と少女がイギリス本土を闊歩していた。それが、イギリス……いや、世界を巻き込んだ事件の初奏だと知らずに……。

- S c e n e P r o l o g u e -

- S c e n e P r o l o g u e -

イギリス郊外。
ある屋敷の庭にて

悠久の自然の中に身を任せながら、
僕はひとつの世界にもまた、意識をもたれかけさせた。

「グリム」

風のうわさできいたものを、自分なりに創作してみたものである。

結構な自信作だと僕は思っている。

そんな能天気な日々は、今思うとそれはそれなりに楽しかった。うん。

でも、ね。今には遥かに敵わない。

だってね

～
～
～
～
～
～
～
～
～
～
～
～
～
～
～
～
～
～
～
～

とんとんとん

ある昼下がり。文で表したらそうでもないが、実際のソレは、酷くうるさいものだった。

この奥まった書斎にまで聞こえてくるのだから。

はぁーっと嘆息しながら玄関に向かう。

「はい。どなた様？」

「すみません。居候させてもらえるお屋敷を探しております、旭川ツビルと申します」

僕が、ドアを開けるや否や、少女(?)は早口に捲し立てた。

目の前にいたのは、少し赤毛っぽい髪を短く切った少女(?)と、切れ長の目は、ちょっと冷たさを感じるがそこまで角が鋭くない漆黒の髪 of 青年。二人共、目は黒だった。

東洋人か？

「俺はタナトス……。タナトス・ムーンガルドだ」

東洋人じゃんっ！

そんな突っ込みをしなかったのは、ある物に目が惹きつけられていたからだ。

杖？ 材質は鉄、じゃないな……。

男の、男が持っている杖が何故か気になったのだ。

視線に気づいたのか、男は杖を胸の前に持ってきた。

そして、顔をさぞ面白いものを見たかのように歪めた。

「私は神を超越しせめし - 死 - という者だ」

「っ！」

……お前は……何者だっ！

- Scene 1 - 訪れ（前書き）

「…………ふわあっ！」

男のしなやかな指が、少女の卵がごとく柔肌を伝い、少女の体液をぬぐう。

「我慢しなくていいよ？声をあげても…………」

「だ、だいじょうぶです…………。お願いします…………」

少女は頬を上気させ、消え入る声で懇願した。

「…………いくよ」

「…………んっ！あ…………」

そして男は、少女が差し出した優美な脚を持ち上げ、少女の最も敏感な所に口を、つけた。

そして少女は大人になった。

- Scene 1 - 訪れ

「えろおおおおい！！！！」
ツビルが叫んだ。

「どこにいかかわしいところがあるんだ？」

「あなたの行動全てですよっ！！」

この、歩く猥褻物っ！と続くツビルの罵声に、俺は背に哀愁を漂わせた。

「言つてませんしっ！漂つてもいませんっ！」

それよりツツコムべきなのは最後ですよ！なんですか！大人って

「一皮むけたじゃないか」

「確かにねっ！」

ついてこれてない皆様に詳細を記載する

今日も、居候させてくれる家（欲が働いて大半屋敷）を探しまわっていたタナトスとツビル。

本日も追い出されまくり、途方に暮れていたときだった。

一人の少女が横でこけたのだった。そう、それが真相である。なんともしよばい真相だ。

以上

「でも、痛みを伴うことで、成長するのは確かだ……」
「そう、ですねえ」

この通りだ……。ギャグを入れたかと思うと、間髪入れずにシリ
アスを

投擲してくる。ロシア兵もびつくりだ。

だから苦手なのだ、この人が……。

でも、それがこの人の、タナトスの いや、今はまだ……。

「うむ、でも……女の子が自分を慕ってくれるっていいよね」

シリアスマード台無しである。

腰のあたりに抱きついている少女の頭を撫でながら、タナトスは

ニヤニヤしていた。

ちょっと引いたね。

「この街を抜けて、この道を進んでいったら、大きなお屋敷がある
んですよ」

少女は物悲しそうにしながらも、手を振り送ってくれた。タナト
スだけを……。

私は睨まれたけど……。

- Scene 2 - 思惑の書（前書き）

少年は、どこにでもいる中学生だった。

勉強は苦手で、仲間と遊んではかりいたし、異性にも人並みに興味はあった。

その平凡な生活を壊したのはいつの間にかそこに君臨し、偉そうにふんぞり返った義父だった。

- Scene 2 - 思惑の書

舗装された道から外れ、車は草原に出来た荒れた道を走っていた。草原を抜け、車はある集落に差し掛かった。

「ここ……は？」

カロリスは訝しげに尋ねた。

しーんつと静寂な空気を断ち切るように、タナトス・ムーンガルドは「はぁー」と、嘆息気に息を吐いた。

「例の書物がここにある、と何度言えばわかる」

「い、いや。まあいいです……」

カロリスが諦めたように引き下がると、今度は隣にいたツビルがタナトスに突っかかっていた。

この二人は、二日前からカロリスの別荘に居候している東洋人であった。二人はなにかを探しているようで、昨日は街でいろいろと訊き回っていたようだ。そして翌日が、この様だ。

「さて、いきますか」

ツビルが柔らかな微笑みをこちらに向けてきた。さすが、そこらへんを出来る所は少女らしい体躯や顔をしていても、根は大人らしい。

カロリスはちらりともう一人の同居人を見た。古ぼけた車のボンネットに座っていた彼は、すつと降り、バックミラーに掛けてあったコートを素早く羽織った。冷たい目をしていながらも、目にはまだ何かが燃えている。何かが映っている……そんな感じがした。

「はい。よくわかりませんが、はやくいきましょう。うよ。

言う前に、タナトスに手で制され、カロリスは黙り込んだ。

何にしても怖いのだ、この人が。本能的に避けている。

「待て。カロリス、“グリム 第二小節”を読む準備をしてくれ……。覚悟を決めてな……」
カロリスは言われたとおり、出発前に渡された直筆の羊皮紙を懐から取り出した。

覚悟……とはなんなのだろうか……。

昨日、彼はこう言った。「お前がストーリーを直筆で書いてくれてて良かったよ」と。その意味がわかるのだろうか？今日ので。

つと、その時。

「つぶないっ！」

右肩に物凄い衝撃があり、カロリスは吹っ飛んだ。力を抜いてたのもあるが、青年一人をこんなにも軽々しく飛ばせるとは何事だろうか。

しゅんっ！

何かがわずか頭上を横切った。

「ボーツとすんなっ！死ぬぞっ！」

見ると、彼の前に、タナトスがたっていたのだった。

杖を振るって、投擲されるナイフやらフォークやら鋤やらハンマーやらを、打ち落としていた。それから視線を遠くした。ぼやけたタナトスの背中越しに、この村の住人であろう人達が いや、人と呼んでいいのだろうか。意思や生気が全く感じられなかった。

だらんと垂れた両手に凶器となりえぬ物を持ち、回転させ、飛ばす。ただそれだけだった。

「あ、あれは……」

「生ける死体……というべきなんだろうが……ゾンビではない。意思をそがれたただの村人だ」

意思をそがれた？

「そつだ。だから今度は精神をそぎ返す」

理解、しかねた。

どういふことなのか、彼の頭には理解しえないことが、視覚、聴覚を襲った。

「カロン……。 “第二小節” を読め……」

もう、彼には、反論する術は残されていなかった。

【狩れ。狩り取れ。

一系のところは流るるままに

星と月は答えた

“闇に生きし者は光に生き得ず、あらがえない”

太陽はあざ笑い、私を忌々しげに照らしつけた

天を埋め尽くす幾億の小さな存在達も

ただひとつの存在に打ち消される 打ちひしがれる

空を切る腕は切り落とされ、自我を失った】

タナトスは薄ら笑いを浮かべた。

青白く光る杖を握り締めた。冷たい感触が手のひらを伝い、身体全身を包み込んだ。杖は本来の姿に戻りたいらしく、いつもの鼓動より、脈が荒かった。

「私の鎖は今解き放たれた！我は……神を超越しせめし - 死 - という者だ」

杖 と思っていた物は形を変え、鎌になっていた。大鎌。仕掛け刃だったのだった。

その大鎌。形容すると、デスサイズ。死神の鎌。

「チビル！カロン……カロンを守れ！」

「分かりましたっ！」

さっと、タナトスとツビルは入れ替わり、ツビルが胸から小型拳銃を取り出した。金色にコーティングされたそれは、神々しさを放

つばかりである。

「死を記憶せよ《Memento mori》」

黒いコートを羽織い、鎌を担ぐその様は、まさしく死神。

その男、冷たく、そして本来の人間味溢れる笑みで……。恐ろしく、普通の笑みで……。

刈っていく。刈っていく。刈っていく。精神を。死欲を。そして、絶望を。

青く揺らめく刃が橙色の虚空を切るたびに、青から蒼へ、そして藍へと色を変える。それを意味するのは、ただ意思のみ。

青が人影を通りぬけるたびに、人影はひざまずき、一影となる。

そして、終わったと思えるその時には、ただ、燃える書物しかなかった。

・ S c e n e 2 ・ 思惑の書（後書き）

思惑の書。

生けるものから意思をなくし、意志にとりかえる。

その過程は、辛く苦しい……

- Scene 3 - 偶像（前書き）

偶像……神を象ったそれは、それなりの恩恵を授かる。しかし、それは始祖の物に限る。つまりは、その偶像を所有することによって、象られた神の力を薄まっていながらも使用することができるようになる。

そう思ったが。母がそう出来ない理由が分かった。分かっていた。少年のためだった。経済的なことだった。そして、一年後、母は死んだ。

最期の姿は居間で倒れたやつれた母だった。

葬式の後は今まで一番酷なものだった。

椅子で顔面を思い切り叩かれたり、首をつかまれガラスに突っ込まされたり。凄惨なものだった。

畳は血に染まり、少年は立つのも不可能な状態だった。

殴られる殴られる殴られるナグラレルナグアエル痛い痛い痛いイタイタイ痛い。

苦しいのはもういやだ……。そうだ、こいつを殺せば……。

少年の心にどす黒い感情が廻った。

殺せ殺せ殺せ殺せコロセコロセコロセコロセ

少年はカバンからカッターナイフを取り出し、義父の背後に立った。

く……く……く……く……く……く……く……く……く……く……く……く……く……

「ははっ！まだ動けるのかい？この人殺しがっ！」

フレンド マーダー
「仲間殺しが……言うかよ。それ……。はあ……。はあ」

伯爵はまた、ははっ！と笑った。

「そりゃそうだ。しかし、我ら兵士だったものは人を殺して当然だろうよ。さあ、意思を捨てたまえよ。苦しいのはいやなんだろう？吐

き出しちまえよ、意思を！」

先ほどまでの丁寧な物腰は崩壊し、飢えた獣のごとく咆哮で捲し立てた。

さて、どうしたものか……。俺は今、動けそうにない。だったら、救援をよぶか？どうやって。二人は別の部屋に泊まっている。助けをもとめたところで、聞こえるはずがない。

「さあ、考えろ！考えたところでどうも出来ないがなあ！ははっ！」俺の考えを見抜いたかのように言い放った伯爵。

「ああ、そうだな。“今”の俺にはどうもできないな」

「そうだろそうだろっ！お前は無力だっ！」

言葉の意図が分からなかったのは、精神が錯乱しているからだろう。

所詮そうなら、ただの獣。俺には歯向かえない。

「……冥土の土産に……ひとつ聞かせてくれ……なんの偶像だ？」

言葉は理解しかねるが、伯爵には伝わったらしく、冷たく微笑んだ。

「ンザンビ。ゾンビの語源となった神の偶像だ」

そしてその虚像。

「そうか……。しかし、先ほどの問いは、貴様の冥土の土産だ」

そう言い放つと、立ち上がった。

「なぜだっ！なぜ立ち上がれる！四肢の意思は削ったはずだっ！」

「人間ではそうだろうな、動けんよ」

不敵に笑い、胸元で光っているソレを取り出す。

神々しい光を放つソレは、少年に翼をつけた像だった。

「……我は神を超越しせめし-死-という者だ」

その冷たい声と落胆の悲鳴が重なり合う。

「タナトスの偶像？否、虚像だ」

「馬鹿な……。虚像だけでは人間の境地を脱してしまっぞ！」

「言っただじゃないか。人間ではない、と」

伯爵の顔が驚愕に歪んだ。いや、恐怖か。

「身を滅ぼすぞ！」

「私達は生まれたとたん死に始めている」

「は？」

唐突の言葉に、伯爵は息を止めた。

「そして“人生はほんの一瞬のことに過ぎない。死もまたほんの一瞬である”」

なにかの文章を読むがごとくに目を細めた。

「簡単だろ？一瞬がどれだけ短くなるうと、一瞬なんだ」

とめていた息を吐く伯爵を視界に捉え、唱える。

【われわれは絶壁が見えないようにするために
何か目を遮るものを前方においた後、安心して絶壁の方へ走って
いるのである】

「皮肉だろ？お前ら人間はいつもそうだもんなあ？」

カツ、カツ、といつの間にか履いていたブーツが床を鳴らす。

伯爵は腰を抜かせ、恐怖のあまり失神した。

「冥土の土産にいいことを聞かせよう。神はいる……。じゃあな、
いい旅を。軍曹……」

伯爵の首筋に手を当て、何かを呟いたその時、伯爵の身体は黒い
砂となり、月の御許に真の光を輝かせるのだった。

窓の脇に置かれた名もない野草は、主人の死を見届け、役目が終
わったかのように、黒い砂とともに空を舞った。

- Scene 4 - 像 (前書き)

力が欲しい……。

この国を見返す力が欲しい……。

私をいらぬと見放したこの国が妬ましい。

そんな時、私に希望の光がさした。

私の手には「思惑の書」という書物が収められていた。

なかには、ンザンビという神と偶像の存在がこと細かく書かれていた。

そう！これこそ私が求めてきた力だ！

早速一つの集落を買取り、村人に私に授かった力を使った。

するとどうだろう。村人が私のいうことをきく駒となったのだ。

しかし、偶像だけの力では精々、二人や三人程度のゾンビは作れなかった。虚像の話が私の耳に入ったのは、そう落胆した時だった。

虚像だけを使うと、神の力に耐えられなくなり、身を滅ぼすというが、偶像と虚像を上手い具合に使用すると、人間が持ちえる力の最大限を与えられる。

私は「思惑の書」を、人を操ることが出来る書物として公開した。そのエサに釣られ、やってきた阿呆共を村人だけでは飽き足らず、ゾンビにした。ゾンビというが、実際は意思をなくした人間だ。長く拘束してはもたない、あと少しで攻め込まなければならぬ。そう考えた矢先だった。

あの男がやってきたのは……。

- Scene 4 - 像

空虚な部屋を統べるのはただ無音だけだった。

そこに男のため息が混ざる。

そしてまた無音。

窓際に座り込んだ男はそのまま身動きする気配はなかったが、その姿には圧倒的な存在感があった。

男、というより青年と形容したほうがいい年齢なのだろう。若々しい肌を、月明かりが照らしだした。

「どうしましたか！」

バタンつと、物凄い音が沈黙を打ち破り、甲高い声をあげながら少女と少年が流れ込んできた。

少年は十八歳か十九歳程度のまだ大人とはいえないながらも飄然とした立ち居振る舞い。一方、少女はといえば、十五、六歳ほどの容姿をしており、どこか落ち着きなくおろおろしていた。

「……帰るぞ。偶像を破壊して」

青年はそう言い立ち上がった。

「偶像？」

少年は怪訝そうに訊いた。しかし、その答えは無言の沈黙。

青年は顔をしかめたが、すぐに普段の冷たい表情に戻り、歩き出した。

1 .

無駄に広い庭に、先ほどまでにはなかったであろう巨大な像が建っていた。

醜悪な姿で、しかしどこか悠々と……。

「これ、は……?」

少年は手で笠を作り、頭上高くを見上げた。

「神に捧げられし像。神に象られた像」

青年は低く呟き、杖を天にかざした。

月にねめつけられ、滑らかな表面をあらわにした杖身は、自然のものではない、白く輝きを帯びていた。

「死を記憶せよ《Memento mori》」

青年が唱えると同時に、杖の先端から、栓がとれたかのように、刃が出てきた。

黒いコート、黒い皮製のブーツ、そして漆黒の髪。そのどれも揺らすことなく青年は前に歩き出す。風もその行方を見守った。

【かつてマルティン・ルターはこう言った。“死は人生の終末ではない。生涯の完成である”と】

歩きながらも淡々と詩を読むかのように言葉を並べた。

【しかし我は思う、その完成品は誰が愉^{たの}しむのか……】

青年は立ち止まった。

【死神と悪魔は“戯れ”、神、天使にては“愚行”なり……。それを示すは……】

セファール・ラジエル《S e f e r R a s i e l》

突如、潜んでいた風が吹きすさんだ。

ソレは人間に激しい耳鳴りを与えると同時に、デストルドー……死欲を取り去った。

「その風、我を導かん……」

漆黒の風の軌道にのり、青年が空高く舞い上がった。

丁度、像の首下あたりに達した時だった。

月光が辺りを切り裂いた。

朝。

崩れ行く像と屋敷を目の当たりにし、人々が驚嘆の声を漏らした。崩れ行く物に対してではなく、屋敷の存在に対してだ。

アホだね、ほんつとアホ……

喧騒の中、その透き通った声が青年、タナトス・ムーンガルドには聞こえた。

「愚かしいな……ほんと愚かしい……」

青年は、その声に戻すかごとく、深く呟いた。

「あれは……偶像とはなんなのですか？ “本当の力” とやらの真相も……」

その呟きを聞きつけ、少年、カロリス・バートンが尋ねた。

「説明か……。どうも苦手だ。文学は得意ではないものでね」

そう笑みを漏らし、カロリスの執筆作品である「グリム」を取り出した。

羊皮紙に書かれたそれは、昨日の戦闘をかいくぐってもなお、くたびれておらず、字にも躍動感が加わった気がする。

「 “本当の力” とは、云わば魔法みたいなものだ。言うまでもないが、その力とは生きている」

カロリスは腑に落ちない様子でふうむ、と呻いた。

「でわ、その力と僕の文とどうつながりが？」

「君はそれを本気でいつてるのかい？」

ジト目で見られながらもカロリスは、「は、はい」と頷いた。

「はあ、貴様の脳はやはり字をつづられた紙で出来ているのかい？なるほど、それならば脳に虫食い穴があったとしても不思議ではないな」

「く、く……。そ、それで？」

要するに、バカという言葉をまにつけて、堪えながらも話を続け

させた。

「簡単だろう。貴様の書物が“本当の力”に帯びているんだ。本に必要なのはその意思だ。“本当の力”というのは“本”にあつて“当”然の“力”だ。本来、本という物は、詠むためにうまれたものだ」

そこでタナトスは深く息を吸い込んだ。

「魔法を使用するときは呪文を唱えるだろ？それと原理は一緒さ。魔法はその呪文に含まれる特定の周波数、意思、そして音列。それだけで魔法は成立する。魔法は厳格な幻覚だ」

そこで二度目の笑みを見せる。

それは今までの冷たさをかき消すほどの、無邪気な微笑みだった。

「聴覚でその周波数やらをよみとり、脳を混乱させる。炎の球が迫ってくるグラフィックを見せたり、皮膚神経に焼け付くような痛みを与えたり……。しかし、本当の力は意思の強いものに授かることができる。以上だ」

歩く彼の背中を見つめながらカロリスは思うのだった。

偶像の、説明は？

- Scene 5 - 英国首都 (前書き)

戦乱の世に終止符が打たれ、平凡の日々が帰ってきた。

しかし、それは血に飢えた輩がこの地に戻ってくることを意味するのだ。

我々、スコットランドヤードは、この街を衛するため、尽力する所存である。

- Scene 5 - 英国首都

「わあ！ロンドンです！初めてです！」

クルクル、そしてキラキラしているツビルさんをタナトス子爵が一瞥し、顔をしかめた。

「うーん、やっぱりツビルさんには甘いんだなあ、タナトスさんと、思った。」

いや、嘘！

「うーん、やっぱりツビルさんには甘いんだなあ、タナトスさん」
言っただけ……。うん。

しかし、タナトス子爵はただ無言。憤怒することなく、僕に近づいてきた。

そして……

「いで……イデデデデデデ！」

「出たっ！先輩の必殺技、グリグリ攻撃！」
地味だっ！しかしよく効くもんだなあ。

もう……無理っ！

「ぎ、ギブ！死ぬ死ぬ！」

そういいながら、僕は車のボンネットをバンバン叩いた。すると、タナトス子爵はこれまた無言で拳を納めた。やっぱり、甘いのかな、この人……。

「あーあ、車をそんなに叩きやがって……。あー、へこんでない」
僕がへこんでますよ

「あの。タナトスさんはいずこへ？」

バートン家、ロンドン別荘にて。

「さあ〜？ちよつといつてくる。としか……」

聞いてません……。と消え入るような声でこつちを向いてきた。

一瞬の静寂。

「はっ！」

「ううっ！」

二人共、気まずく顔をそらした。

こ、こつち見てると、ツビルさんって美人　いや、美少女だよな

……。

「わ、わたし！お茶、いれてきますねっ！」

突如、声をうわずらせ、ツビルさんはリビングから去っていった。

十五、六歳にしか見えないというのに、自分で二十一とか言い出

すんだ。あの人。

2 .

スコットランドヤード応対室。

「はあ、どういうことだね。ムーンガルド子爵……」

まるで古くから使い込まれたかのようなしわがれ声がそこに響いた。

ムーンガルドと呼ばれた青年は静かに答えた。

「どうもこつちもないでしょう。こつちなら」

しわがれ声の主は、ふう〜とため息をついた。それには呆れの色が混じっていた。

この老人、アスカム管理長官。

「だが、子爵……。陽動などでまんまとおびき寄せられる相手じゃないぞ。そもそも、陽動作戦に参加する者の命が危ない」

「問題ない。それは私がやりますから」

管理長官は子爵をねめつけた。

「一人でか？不可能だ。仮にも国民、しかも子爵位の人間をなくすことなぞ出来んぞ」

そのぱつとしない管理長官の言葉に、子爵は静かに立ち上がった。「こんな時に、そんな悠長なこといつてるから髪の毛に愛想をつかされるんです。タコやろうっ」

がばつと立ち上がり、頭を隠す管理長官を尻目に、子爵は冷淡に続ける。

管理長官はぶるぶるしながらも反発する。

「し、しかしっ！君にもしものことがあつたら……」

「何を言ってるのですか、タコやろう。いちいち生臭いのでしゃべらないで下さい。しかし、その大量にあるアシはハゲ頭の手入れをするもんなんですか？愚かしい」

「大量にあるものか！それにタコは強いのだぞ、サメを喰らう。そのタコをぶじよ」

「強さが正義？はんっ！外道が口にするに値する言葉だなっ！」

そう言い放ち、彼は応対室を大きな音を立てて、出て行った。後に残ったのは、すすり泣く声と、散り散りの髪の毛だった。

3 .

「パーティ、ですか？」

飄然とした様子でカロリス・バートンは訊いた。

一方の青年は飄々とした態度で接していた。

「ああ。女王陛下主催だそうから、陛下もお姿を現されるかもしれない。……どうだ？」

カロリス・バートンは考えた。

そして答えを出した。

「……いきます」

かろうじて出た声は、ひどく干からびていた。

この時、カロリスの中で葛藤がおこっていたのだった。

「お待たせしましたあ〜」

そう、ふんわりとした声が、緊張の糸をほぐした。

出てきたのは、妖精。と形容するに値するほどの美少女だった。

「つ、ツビルさんっ？」

いつもは庶民的な地味な格好しかしていないために、今のツビルの格好、ピンクのドレスは誰の目も惹きつける魅力に満ちていた。

しかし、その姿に、青年は嘆息した。

「今から準備してどうする……。気が早すぎだよ」

ツビルはぶくうっと頬を膨らませて、食いついた。

「いいじゃないですかあ！めったにこんな格好できないんですから！」

「知るか！折角の衣装なんだ、汚すなよ？」

「はい」

そんな日常的な会話を、聞き流すような形で、カロリスは客観的な世界に落ち入っていた。

仲間。人。その言葉が彼の頭の中を反芻する。

歯を食いしばり、カロリスは現実に戻ったのだった。

4 .

なんと形容すればいいのだろうか……。

天井には無数の宝石が散りばめられ、天体を模しているようだ。

「なぜ天井ばかりを見ている、伯爵」

不意に声を掛けられ、僕は素早く身構えた。

「子爵。やはりこの喧騒は僕には合わぬようです……。気分がよろしくない」

相手がムーンガルド子爵と判別するやいなや、構えを解き、顔を

しかめた。

「そうか。すまない。無理に誘ってしまったな」

「いえいえ！とっても楽しいです！ほんとです！」

少し表情が曇った子爵に気づき、僕は必死にフォローした。

何故だろうか。人には関わりたくないと思っていたのに。壁を作っていたのに。

この人達には僕のそんな壁なんかもろくしてしまふ。

「そうか。でも無理はするな。……では、また、伯爵」

他人から見て、不自然じゃないように、子爵はお辞儀をした。

そして去っていく背中。

そこに無意識にでた、僕の手が追いかける。

もう少して子爵の背中に、届く

「み、みなさ、うぐ……に、にげて……」

バタツ。

……。

『きゃあああああああ！！』

夫人や令嬢達の悲鳴があちこちからあがった。

男たちはただ、立ち尽くすばかりであった。

刹那、そのざわめきが収まった。

「皆さん。お静かに」

パンパン。と手を叩く音が聞こえる。子爵だ。

子爵は音や風を起こさずに、倒れた男が出てきたところに入っていった。

貨物室？

何事もなく、出てきた彼に視線が刺さる。

「飛行艇用の水素が漏れ出した。というより、故意に漏らされたと

いづべきでしょうか」

彼はさっと、倒れた男を視認した。

「水素は空気中に拡散すると、爆発を起こすと、噂されます。真実か否かではなく。こういうときは最悪の事態を考えるべきですよ」

そういうと、彼は二人組みの男爵にちらりと視線を向け、笑った。陰口が聞こえていたのだった。

二人組みは腰を抜かした。

「そういうことで、下手に動くことと死にますよ？あと、極少量の静電気などでも、薄汚い花火があがることになりますからね、なんせ」
言い残すと、彼はまた貨物室に戻っていった。

……

……

……

沈黙が僕の肌をなぶる。ぴりぴりと痺れる皮膚を、撫でようとして気づく。体が動かない。

誰もが、緊張の糸を切らないように慎重に動いていた。

何故だ。優秀な僕が、こんな下種共と一緒に何も出来ないなんて。それに怯えている？この僕が？

「ああああ　　」

視線が僕に集まる。でもそんなことは関係ないっ！僕は、やってみせるっ！

違う！やらなきゃいけない！失敗は死だっ！

そう思い、僕は歩き出した。

床との摩擦をさけるため、靴を脱ぎ、慎重に貨物室に向かった。

- Scene 6 - 聖音（前書き）

はあ。はあ。はあ。

リズムがいい吐息が激しく響く。

カツカツと近づいてくるブーツの音に生を殺した。

「神さん。神さん！」

先日知り合った人物の愛称を呼ぶ。もっとも、この男にはそれが愛称だということは知らされてなかった。

「神様あ！神様あ！あんた神さんなんだろう！助けてくれよあ！」
下が何も無い、肩をさすりながら、男は叫んだ。

錯乱していたのだろう。現況を忘れていた。

瞬間、男の目の前にどこぞの酒の空ビンが転がってきた。

「おい。今のうちに外に出ておこうぜ！」

「バカか！今は乾燥している。鉄製のドアに触れたらドカン！だぞ」
愚かだ。聞くに堪えない……

「お前も、しろよ」

顔を察してくれたのか、子爵は自分の耳を指した。

そこにはウールが押し込められていた。

だけど、僕は首を横にふった。

「そうか」

そう呟くと子爵はウールを取り去った。

そして、

「お前は、昔の俺に似ている……」

目を細め、思い出すように話し出す。

「世界に絶望したというフリをしながら、人間という存在を否定してきた」

当てはまることであつたため、僕はたじろいだ。

僕の反応を愉しむように、子爵はニヤリと顔を歪めた。

「俺は逃げた。逃げてたことに気づいた。自分のほうが他人より上？違うな。俺より上のやつなんかざらにいる。と気づいた」

何故か、子爵の言葉が僕自身をさしているんだって思った。

怖い。

そうか、最初に会ったときの恐怖は自分に似ているからだったんだ。

「うるさい！僕より優秀な人材はいない！僕は昔から神の子としてあがめられたんだ！」

なんでだろう。口が勝手に言葉を吐き出す。おまけに涙まで……。

「哀れだな……」

「黙れ！あんただって僕と同じならわかるはずっ！人間に信頼を与えることの無意味さぐらいわかるはずだ！」

子爵はひとつ、息をついた。

「勘違いするな。俺はお前と同じなのは境遇だけだ。俺はお前より

……遥かに強い」

そして、と続く……

「今のお前は人間以下だ。お前が喋り、地球を害する気体を排出するよりかは、まだアリの観察をしているほうがためになる」

ふんつと鼻を鳴らし、子爵は貨物室を出て行った。

1 / ムーンガルド

ホールのほうは大丈夫だろう。あれだけ言うっておけば、流石に動くだろうから。動かないとすれば、それだけのやつとしてほうっておくだけだ。

「さあて、これは厄介になってきやがった……」

一人呟くと、さつき貨物室で作っておいた、自然発火装置を取り出し、微調整をする。ホールで使うつもりだった。

先ほどのボーイの傷と水素貯蔵容器の傷。それは全く同じものだった。そしてあの深く、抉り取ったような痕。このことから、ある仮説にたどり着く。

だが、その仮説が成立してしまうと、ボーイはすぐに絶命し、水素に気づかぬまま、ドカン！となっていただろう。

……仮説とは「死神が沢山の魂を回収するため、水素を充満させたところに発火させる」というものであった。これは相当近いと思われるが、やはり気がかりなのはボーイの件だった。

死神は古来より、何でも断ち切ることが出来ると云われているデ

スサイズなるものを携えている。

俺が持っている模作品なんかとは、はかりしえないほどの力を持っているといわれている。

死神の鎌は一撃で人を殺めることができるのだ。

今、俺は貨物室から出た後、開いていた隙間から廊下に出て”血の痕”をたどっているのだった。

まだ乾ききっていないため、極最近のものと推測された。

しばらくたどっていくとアルコール室という表札が掲げられた部屋の中に入っていた痕跡があったため、怪訝に思いながらも俺は入っていった。

ん……。微かに人間であろう吐息が聞こえてくる……。

む。怯えの色？犯人なのはまず確定だが。今になって怯えているのか？

わざと、ブーツを鳴らし、真っ直ぐに進んだ。

「神様あ！神様あ！あんた神さんなんだろっ！助けてくれよお！」

突如の叫び声。

バツと振り向くと、酒瓶と酒瓶の間、丁度隙間になっていたところに、男はいた。

グッタリとした男は至るところから水分を放出し、情けない怯えを見せていた。腕がないその男は立つことすらできず、ただ痛みと恐怖に押しつぶされていた。

「ふんっ」

俺は鼻で笑いながら、目の前に置かれたウォッカのビンを手にとった。

「男の怯えた顔なんざ見たくない……」
そう言つと、俺はビンの栓を開け、そのまま逆さ向けた。案の定、
中身はこぼれ、あたりにアルコールのにおいが立ち込めた。
それは所謂、死の臭い。

俺は、自然発火装置を設置し、部屋を去つた。

2 / カロリス

僕が……僕が人間以下？

はっ、ははは。

笑えない冗談なのに……笑える。その矛盾に、また笑える……。

「っ！」

力なく、その場にうずくまった時だった。

「空気が、変わった？」

ホールに出てみると、まだ、怯えや畏れはあるものの、今まで支配していた絶望がなくなっていた。

「なぜ……」

その言葉しか口を出ない……。ほとんどの者が希望という小さな光を必死でみようと目を見開いていた。この時、僕の人間に対する愚かさ、という概念が変わつた。

「そうか……ははは！」

僕は歩く、ホールの中央へ。

皆は、依然として上を向いている。

「援護する！」

そして僕へと視線が移る。

螺旋階段を登る人影は、微笑んだように見えた。

人々が固唾を飲み、上方の人影を見つめる中、僕は生き生きとした躍動感が伝わってくる羊皮紙を取り出した。

“ 本当の力” が宿るといふ書物……。

しかし、そう呼ぶのは他人であり、僕ではない。そうである限り、僕の書物じゃない。

そうした経緯があり、僕はコレを【トゥルース 眞実】と呼んでいる。

「おい！ 始まったぞ！」

近くの男爵の声に顔を上げる。

丁度、人影がヴァイオリンを持ち上げている所だった。

僕は慌てて口ずさむ……

【小川が運ぶ 冷気を頬にあび……

月に静かに嘯く……】

僕の吐く言葉は、白い吐息となって辺りに拡散する。

弓が弦に触れる音、のちの静音……。音楽にはならないであろう音。

【“ 我は神を超越しせめし - 死 - という者だ”

漆黒の空に彩られ…… 無数の光と闇は一層に輝きを増した】

天井の、天体に模した宝石は、その言葉を理解したかのように周りの光を集め、自ら輝き出した。

弓と弦が激しくこすれ合う！ 求め合う！

【私を連れて行け！

眞の光へ……

孤独よ、舞い上がれ！】

薄暗いホールに風がうずき始めた。無数もの風が、今か今かと力を抑える。

輝きの宝石の下、人影の周りをパチパチという不解な音が包みこんだ。

しかし、それを演奏の中枢に据え置き、見事なハーモニーを際立たせた。

【虚空へと繰り出した脚は……もう】

最後のフレーズを口に出そうとする……が、何故か動かない。舌が回らない……。なんで……？

“哀れだな……”

子爵の先程の言葉がぱつと出た。

そうか……そうだな……これか、答えは……。

【なかつたあー！】

「よく言えたな、しかも、これほどの意思を……予想の範囲外だ」力を一気に開放した風はセンを外したみたいに真上に上がった。

子爵の笑みに、しばし見とれる。

「意思に反していたお前が、意思の塊であるその書物を扱えるようになった。それはその書物がお前のものになったことを示す……」

子爵に僕も笑顔を向ける。

「が、ほのぼのした空気はやはり、僕には似合っていないらしく、水素せい化だっ！」

笑みが壊れ、無表情に戻る子爵、しかし、それはいつもより焦りに満ちていた。

気づくのが遅かった。

パラっと、光る宝石が落ちてきた。

「こ、これは？」

「水素を建材が吸い込むと、脆くなる。この現象を水素ぜい化という……。しかし、なににしても速すぎる！こんなにもはやく水素を吸収するものなのか？」

怪訝そうにつぶやきながらも、子爵は対処法があるらしく、ブーツを脱いでいた。

「カロン。水素はどうなった？」

「知りません、あの人がヴァイオリンを弾いていたら、なぜか雨がふってきて」

音で分解だどっ！と叫びながら、タナトスは僕が指した人影に向かって、全力で走っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1648y/>

ヤーウエの鼓動

2011年11月22日01時14分発行